東海学園大学教育研究紀要　第５号：96-108，2019

「特別の教科　道徳」道徳教科化への対応（2）
－ゼミにおける模擬授業の取組みを中心にして－

矢田貞行 *

はじめに

道徳教科化については、小学校ではすでに平成 30 年度から、中学校では今年（平成 31 年／令和元年）度から始められている。これに対応して本ゼミにおいても、昨年度より道徳教科化に対応すべく模擬授業の中で取り組みを始めてきた。小中学校の教員志望の学生にとって、従前の専門科目の学習指導に加えて、道徳科の指導は担任教員が原則として行うため、きわめて重要な教科の１つでもある。

本ゼミにおいては、専門演習Ⅱ（3 年次秋学期）の時間を利用して、道徳の教材研究・学習指導案の作成を行い、主として１・2 年次の演習（基礎演習Ⅱ・専門基礎演習Ⅱ）において 3 年生が教師役を務め、1、2 年生を児童生徒役に見立てて模擬授業を実施している。

本稿では、平成 30 年度秋学期における「特別の教科　道徳」を念頭に置いた模擬授業について、授業報告を行うことにする。

Ⅰ.「特別の教科　道徳」の授業づくり

上述のように、すでに小学校では平成 30 年 4 月から「特別の教科　道徳」が始められ、これまで培われてきた道徳の授業実践に基づきつつも、道徳の教科書を用いた教科としての授業が行われてきている。また同様に、教育実習においても道徳の授業は重複されており、多くの学生が研究授業を行っている。そこで、本学部において玉川大学の小学校通信課程を受講する学生（8 名）には小学校の道徳、それ以外の学生（4 名）には中学校の道徳の模擬授業を行うことを求めた。

まず、ゼミの開講時に「特別の教科　道徳」新設の経緯やその意義、指導上のポイント等を踏まえて、学習指導案の立て方について講義を行った。その後、学生が各自で教材研究を行い、学習指導案を作成するよう指示した。

その際、本ゼミにおいては、教師用指導書を予め学生に見せ、それを参考にして学習指導案を作成することを勧めている。学生たちは、すでに 2 年次の道徳指導法の授業において、学習指導案の立て方について履修しており、ある程度その概要に関しては周知している。また、本ゼミにおける専門演習のねらいが、学習指導案作成自体が目的ではなく、教科化された道徳の授業を、どのように教師として児童生徒を前に限られた時間内で行うかを重視しているからである。

さらにまた、教職という仕事は本来、「型にはまって、型を出る」という過程を経て、職能的成長を遂げる。今日、全国各地の教育委員会で作成されている『教員育成指標』でも明らかなように、着任時、初任段階、中堅段階、ベテラン段階へと登るにつれ、それぞれの指標を習得することで学び続ける教師像が確立されていく。教員の基本的資質能力の１つである学習指導力についてみても、教師は指導書に頼るばかりであった初任当初から、次第に教職経験を深め、周囲の同僚教員の授業参観や授業研究、更

* 東海学園大学スポーツ健康科学部

には幾多の研修を重ねることで自らの型を作り上げ、教師としての力量を高めていく。しかし、まだ教職経験のない大学の養成段階では、こうした先行事例の蓄積である指導書をうまく活用し、基礎的な学習指導力の礎とすることも必要であると考えるからである。

ともあれ、学生が各自学習指導案を作成し、指導教員と事前の打ち合わせを行った上で模擬授業を行うことにしている。その際、最終的な学習指導案のチェック（導入・展開・終末段階の精査、めあてとふりかえりの確認、学習の成果の検証等）とならんで、板書計画の試行（実際に使用する教室における板書やフラッシュカードの確認等）を行う。このことによって、授業の全体像やグランドデザインを鳥瞰することが可能になる。ちなみに、授業時間については、多くの学生は自宅や教室において予め予行演習を試みているようであり、実際の授業に際して定められた時間（45 ～ 50 分）を遵守しているケースが多かったのは、その証拠であると思われる。

Ⅱ．教科化された道徳の学習指導案

ところで、「特別の教科　道徳」の学習指導案とは、どのようなものであろうか。学習指導案自体の枠組みについては、これまでのものと大きな変化はない。ただし、際立った特徴としては、たとえば主人公が経験することを自分事として捉え、自分ならどのように行動すべきかについて「考え、（他人と）議論する」道徳を指向する点にあると言える。以下、その概要について述べてみたい。[1)]

1.「主題名」について

本時の授業テーマである。

2.「ねらい」について

本時で取扱う内容項目について、授業者が大切にしたいこと（道徳的価値）、授業者の道徳的価値に関する児童生徒のこれまでの実態とそこから得られること（児童生徒観）、児童生徒に考えさせたいことについて教材を通じて授業の中でどのように活用するのか（教材観）を書く。

3.「主題設定の理由」について

「ねらいとする価値」「児童生徒の実態」「教材について」から構成される。学習指導案の最も核心を占める重要なところである。たとえば、学習指導要領解説（「中学校　特別の教科　道徳編」）では、(1) 教師の捉え方、(2) 生徒の学習状況の実態や教師の生徒観、(3) 教材の具体的活用法について記述するとされている。

記述に当っては、児童生徒の肯定的な面やそれを更に伸ばす観点からの積極的な捉え方に心掛ける必要がある。また、彼らの学習場面を予想したり、発達段階や指導の流れを踏まえて、具体的で積極的な教材の生かし方を記述する。

4. 学習指導過程

通常、学習指導案と言われるものであり、(1) 導入、(2) 展開前半：教材を基に学習する段階、展開後半：教材から離れ、自分に関することを学習する段階、(3) 終末から成る。具体的には、表１に示す通りである。[2)]

上記の学習指導案について概略すると、以下のようになる。

(1)「導入」

①　ねらいとする価値（内容項目）の焦点化。

ねらいに関わる生活経験を掘り起こす。(たとえば、「○○した時の気持ち」「○○してよかったなと思った時」)必要に応じてアンケートを事前に取っておき、その結果から学級内の傾向性を話題にする。また、教師の説話の一部を導入（続きは終末）に用いてもよいし、主題名をそのまま導入の発問としてもよい。

表１．道徳科の学習指導過程

導入	○本時の課題を持たせる。 ○資料について内容説明する。 ○雰囲気を高める。 ※導入は短時間（5分程度）に止める。これからの話し合いの視点を明らかにする。
展開前段 資料内容の理解について話し合う段階 中心発問 展開後段 本時のねらいに迫る話し合いの段階　じっくり時間をかけて話し合う	⑴資料の提示 ①読み物資料の特色 ○範読…感情を込める。漢字や言葉を説明する。 ○場面絵…文字や言葉を補い、ストーリーの理解を深める。 ○キーワード…主人公の心の動きを表現している言葉に注目する。 ②視覚的な資料の特色 ○動画、絵話…ストーリー全体は理解しやすい。場面絵や台詞カードで理解を確実にする。 ⑵資料内容の確認について話し合う。 ①黒板に場面絵を貼りながら、教師が資料内容の説明をする。 ※※話し合いを焦点づける場面を３つ程度に絞って整理する。 ②主人公を囲む条件や人間関係などを主人公の視点から考える。 ※※※主人公の気持ちや心の動きを通して、条件を理解する。（なぜ、どうしてといった気持ちを考える発問をする。） ⑶主人公の決断や行為を支えている大切な考え方に気づくように話し合う。 ①資料に表現されているキーワードから主人公の気持ちを考える。 ②主人公の心の変化を（表す表現）通して、ねらいの大切さに気づく。 ③児童生徒が主人公の考え方を通して、考えた理由を発表する。間違っていたとしても、それぞれの考えを受け止める。 ④考え方の違いを整理して、それぞれの理由を発表する。 ⑷主人公の考え方から自分にも体験があることに気づく。 ◎資料のことだけでなく、自分の生活に共通していることに気づく。 ◎主人公の考え方は、自分のこれからの生活にどんな場面で生かせるかを考える。
終末	○学習で考えたこと、気づいたことについてまとめる。 ○児童生徒の考えや発言に励ましの言葉をかける。 ○指導のねらいに関わる教師の思い出話などをする。

◎評価については、資料、発問、集中の様子などを、留意点の中に書き込んでおく。
◎話し合いは、読む、考える、話し合う、書く、発表するという活動をバランスよく配分する。

②　教材の導入

教材理解のために、登場人物、背景、舞台や場所について説明する。次いで、教材の紹介をし、興味関心を持たせる。そして、教材名から、どのようなイメージを抱くのかについて発問する。

⑵ 展開前段

①　教材提示

どのような意図で、教材を話し合うために児童生徒に示すのかを明記する。

②　発問

中心発問とは、主人公の心情や決意を児童生徒自身の考え方を基に語り、それぞれの考え方に気づき合うための発問である。さらには、それぞれの考え方のうち最も望ましいのはどれなのかについて、児童生徒が議論を重ねながら発見する。その議論の中で、道徳的価値や自分自身との関わりについて彼らが発見できるように、教師が話し合いをコーディネートする。精度の高い発問を作成するためには、彼らの議論を傾聴し、時にはじっと待つことも大切である。

また、発問の仕方によっても、児童生徒の反応が異なる。たとえば、「○○した時の△△の気持ち（・思い・考え）は」と尋ねるよりもむしろ、「どんな気持ち（・思い・考え）から△△は、○○

したのでしょう」の方が、ねらいとする彼らの道徳性に強く訴えることができる。

主人公の心の変容を問う場合は、「どんな気持ちになったのでしょう」と尋ねたり、教材提示の際にも、「△△の気持ちを考えながら」と課題を明確にする必要がある。

(3) 展開後段

「道徳の時間は、児童１人１人が、一定の道徳的価値の含まれるねらいとのかかわりにおいて自己を見つめ、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを発達の段階に即して深め、内面的資質としての道徳的実践力を主体的に身に付けていく時間である」（小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」）。そこでは、自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深めることが重要な要素となる。

したがって、展開後段における中心発問がきわめて大切になってくる。すなわち、それは価値の主体的自覚を図る発問であり、児童生徒が展開前段で学び取った価値を後段において現実の生活へ広げたり、今までの経験を生かして深めたり、他人と考えを比べたりしながら、ねらいをより確実な形で自覚していくためのものである。

また他方で、ふりかえりの発問であると同時に、前を見る発問でもある。ここでは、たとえば「今日の学習をふりかえり、○○について感じたことを自分なりの言葉でまとめてみましょう」「○○をするには、どんな心構えを大切にしていきたいですか」といった発問が適切である。

さらに、道徳科はねらい（とする価値）に照らして、児童生徒が自らの生き方の中の課題について、深く感じたり考えたりする時間である。したがって、展開前段では共通の教材に基づいてねらいとする道徳的価値を学ぶが、後段では各自の生き方の課題に拡散させて深く感じたり、考えたりしなければならない。十人十色の課題があり、それぞれに応じた考え方がある。どのようにふりかえるかについては、彼ら１人１人に任せるしかない。前段では、児童生徒を指名して発言させる場面は当然考えられるが、後段では無理に発言を促してはいけないのである。

(4) 終末

終末は、ねらいにある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり温めたりして、今後の発展につなぐ段階である。それは、児童生徒１人１人が皆異なる。教師が１つの答にまとめてはいけない。押し付け道徳になってもいけない。まとめは個人固有のものであり、それ故に敢えて終末という言葉を使うのである。

5. 板書計画

板書の役割は、見えない心の在り様を可視化して、児童生徒に思考を深める手がかりとなるものである。道徳科では、目に見えない内面的資質である道徳性を扱うため、個々の学びや全体の学習の成果（心の変容、深まり、拡がり、新たな気づき等）を少しでも見えるように黒板に記録することが重要になる。なぜなら、道徳科は教科のように知識理解や技能を学んだり、習得したことが学力として可視化できないからである。

また、板書に際して、次の点に留意する必要がある。[3)]

(1) 板書計画を入念に立てる。

「思考の流れや順序を示すような順接的な板書だけでなく、違いや多様さを対比的、構造的に示す工夫、中心部分を浮き立たせる工夫などを凝らす」（小学校学習指導要領解説「道徳編」）必要がある。板書計画は、授業活性化にとって重要である。なぜなら、学習指導過程と板書計画は一体だからである。

(2) 児童生徒にも教師にも分かりやすい板書にする。

彼らの発言通りに板書する必要はない。「気持ち」「思い」「考え」を端的に板書する。フラッシュカードについては、発問が分かる程度でよい。

(3) 単なる授業の記録から新たな学習につなげる。

発問→板書の繰り返しだけではなく、児童生徒から出てきた意見や考えを基に、さらに学習を発展さ

せて新たな気づきを導いていく。

(4) 心の多様性を際立たせる板書を心掛ける。

道徳科は心の学習である。心の多様性を児童生徒に気づかせ、考えさせることが重要である。彼らから出てきた意見や考えを色分けして、補助発問（たとえば、「それぞれの色は、どんな心だと思う」と尋ねる）を発し、心の多様性について自覚と分析をさせる。そこから初めて児童生徒は、考え始め、授業が更に活性化する。

Ⅲ．模擬授業の実施

次に、模擬授業を行った学生の事例を取り上げることで、教科化された道徳の一端を紹介することにしたい。ここで例示する学生の学習指導案は、小学校６年生の道徳（「理解し合う大切さ」『「ダン」をどうする？』日本文教出版）を教材とした模擬授業である。

この授業では、「友だちと意見が食い違って考えが１つにまとまらない時、どんな気持ちになりますか」というテーマで、「理解し合う大切さ」について子ども同士が話し合い、大人が子どもたちに教えられたことや、お互いの意見や考えが異なり、いがみ合ってしまう人たちの心にどんなことを教えたらよいのかについて、考えさせることをねらいとしている。

具体的な内容としては、目の見えない犬を拾った子どもたちは、団地で飼いたいと主張するが、団地の規則を変えてまで許可すべきかという議論を経て、最終的には彼らの意見を大人たちが受け入れ、犬の飼育を認めるというストーリーである。なお、学習指導案は表2、授業で使用したワークシートは表3、板書計画は図１に示す通りである。

図１．板書計画

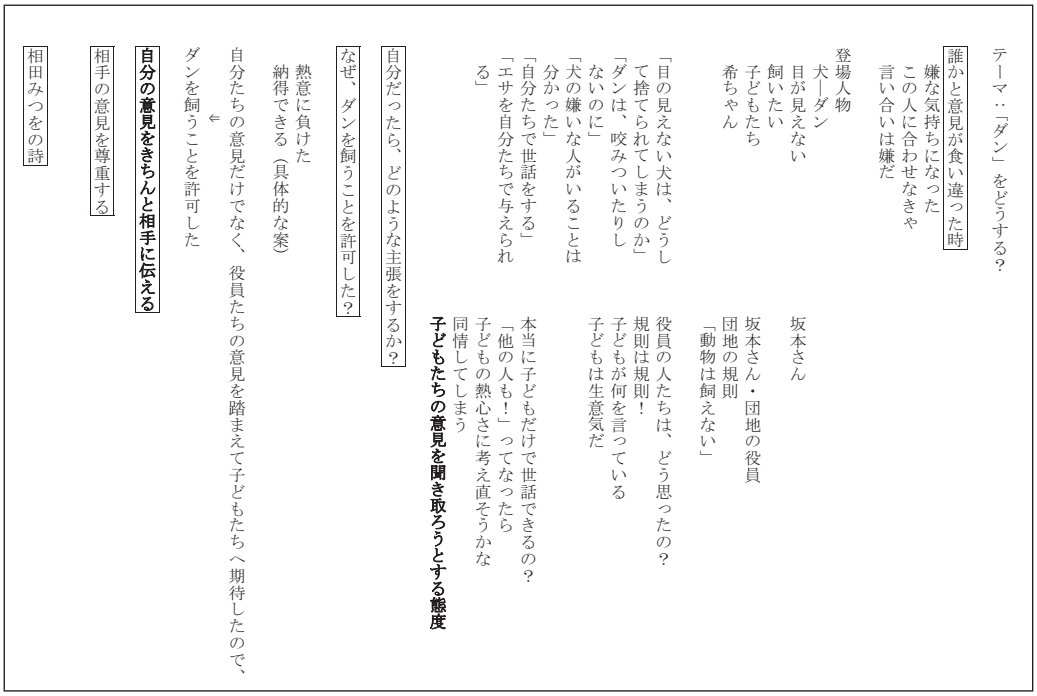

表 2.　道徳学習指導案

第６学年〇組　道徳学習指導

日付　平成 30 年 11 月 26 日（月）第４校時
場所　〇〇小学校６年〇組　教室
指導者　〇〇〇〇
在籍児童数　男子〇〇名　女子〇〇名

１．　**主題名**　理解し合う大切さ
２．　**資料名**　「ダン」をどうする？
３．　**主題設定の理由**

（１）ねらいについて

成長の途上にあり、まだまだ至らなさを持っているこの時期に、自分を謙虚に見ようとする心情について考えさせる。また、相手から学ぶ姿勢を常に持ち、自分と異なる意見や立場を受け止めようとする心情を育てることで、多様な人間がよりよく生き、創造的で建設的な社会を創っていくために必要な資質・能力を身に付ける。

（２）児童の実態について

この時期の児童は、自分のものの見方や考え方について認識が深まることから、相手のものの見方、考え方との違いをそれまで以上に意識するようになる。一方で、考え方や似たもの同士が接近し、そうでないものを遠ざけようとする行動が見られることがある。そのような時期だからこそ、相手の立場になって考える心情を育てることが求められる。

４．　**本時の学習活動**

（１）本時のねらい

自分の考えを相手に伝えるとともに、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重しようとする態度を養う。

（２）展開

	児童の学習活動	指導方法、主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点、評価、準備
導入	〇これまでの経験を想起して、友達と意見が食い違った時の気持ちを考え（個人）、発表する。	〇経験の想起 発問 「みんなは、何か物事を決めようとした時、意見が食い違って話がまとまらなかったような経験はありますか。その時、どんな気持ちになりましたか。」 考え ・嫌な気持ちになった。 ・自分の気持ちを譲りたくないと思った。 ・どうすればいいか悩んだ。 ・他の子の意見を聞きたいと思った。	〇考えたことをワークシートに記入させる。 〇なかなか考えが書けてなさそうな児童がいた場合は、具体例（休み時間に友達とやりたい遊びが違った時）を示す。 ※ワークシート 〇机間指導を行い、発表者３名を指名する。 ※教科書
	〇本時の教材と内容を確認する。 教材：「ダン」をどうする。	〇本時の教材と内容の説明	

	内容：友達と意見が食い違った時、自分はどのような行動をするのかについて考える。		
展開	○教科書を読む。	○指名した児童（1名）に読ませる。	○教科書を読む前に、何に注意して聞くのかを促しておく。 ○声が小さい場合は、みんなに聞こえるように読むよう促す。 ○発問後、挙手がない場合は、指名をする。
	○登場人物の整理と団地の規則の確認をする。	○登場人物の整理 発問① 「ここまでで誰が、出てきましたか。」 考え① ・子犬１匹 ・団地の役員 ・自治会長の坂本さん ・子どもたち（2人の幼稚園児） ○規則の確認 発問② 「団地にある規則があります。どんな規則ですか。」 考え② ・動物は飼えないという規則	
	○教科書を読む。	○指名した児童に読ませる。（4名）	○教科書を読む前に、ここからの内容の大まかな説明（2回の自治会があること等）をしておく。 ○声が小さい場合は、みんなに聞こえるように読むよう促す。 ○発問後、挙手がない場合は、指名する。
	○ダンがどのような犬であるか、1回目の自治会で子どもたちは、どのような主張をしたのかを理解する。	○登場人物整理 発問① 「子犬１匹はどのような犬ですか。」 考え① ・名前は「ダン」。 ・目が見えない。 発問② 「今読んだ中で、発言した子どもたちが３人出てきました。誰が発言をしましたか。」 考え②	○子どもたちは、ダンを飼いたいと思っていることを確認する。

		・希ちゃん ・6年生の男の子 ・5年生の女の子 説明 ・子どもたちが、それぞれどのような主張をしたかを整理する。（希ちゃん、6年生の男の子、5年生の女の子） ・板書にそれぞれの主張をまとめる。	
	○子どもたちの主張を踏まえて、役員の人たちがどのように思ったのかを考える。（グループワーク）	発問③ 「子どもたちの主張を踏まえて、役員の人たちはどのように思ったでしょうか。」 考え ・団地には規則があるのだから、許すことはできない。 ・住民の中には、犬嫌いの人もいる。 ・本当に自分たちだけで世話ができるのか。	○役員の人たちが思ったことには、犬を飼うことに対して反対の意見が多いが、一方で子どもたちの話を聞こうとする態度があることを理解させる。 ○子どもたちが主張したことに対して、役員たちは何と言っているかを教科書を見て参考にするよう促す。 ○グループワークを行い、ワークシートに考えを記入する。 ※ワークシート ○グループワークは、司会、意見を発表する順番を明確に示し、スムーズに展開されるようにする。 ○各グループ１名、グループの意見を発表する。 ○自分の考えをワークシートに記入させる。
	○子どもたちの主張と役人の主張を踏まえ、自分だったらどのような主張をするかを考える。 ○教科書を読む。	発問 「子どもたちの主張と役員の主張を踏まえて、自分だったらどのような主張をするかを考えていてください。」 ○最後まで、指名した児童１名に読ませる。 発問①	○ペアを作り、考えた主張をお互いに話し合う。 ○1名指名する。 ○声が小さい場合は、みんなに聞こえるように読むよう促す。 ○1回目の自治会で子どもたちの主張を参考に考えさせる。

	○2回目の自治会を経て、役員の人たちが、なぜダンを飼うことを許可したのかを考える。（個人→グループワーク）	「話し合いの結果、ダンを飼うことはできましたか。」 考え① ・「はい。」 発問② 「なぜ、あれほど反対していた役員の人たちは、ダンを飼うことを許可したのでしょうか。」（子どもたちのこれまでの様子から考えてみる。） 考え② ・子どもたちが、一生懸命自分たちの主張を伝えようとしたから。 ・自分たちの考えをただ主張するのではなく、きちんと相手の意見も考えて発言していたから。	○最初に個人で考え、ワークシートに記入させる。次いでグループワークをさせる。 ※ワークシート ○グループワークは、司会、意見を発表する順番を明確に示し、スムーズに展開されるようにする。 ○各グループ1名、グループの意見を発表する。
	○役員の人たちが、子どもたちから教えられたことについて理解するとともに、本時の授業で最も大切になることを理解する。	説明 ・「今回は、子どもたちに教えられたような気がする。」役員の人たちは、子どもたちから大きく2つのことを教えられた。 ・自分の意見をきちんと相手に伝えること。 ・相手の意見を聞き、尊重すること。	○「なぜ、ダンを飼うことを許可したのか。」という発問に対する児童の考えと関連させながら、説明する。
まとめ	○本時の学習を通して、誰かと意見が食い違った時、どのように行動するか考える。	○誰かと意見が食い違った時、どうするかをワークシートに記入する。 ○考えたことを発表する。	○自分の考えをワークシートに記入させる。 ※ワークシート ○数名指名し、考えを発表させる。
	○相田みつをの言葉を考える。	○相田みつをの言葉を紹介する。 「セトモノとセトモノとぶつかりっこすると すぐこわれちゃう どっちかがやわらかければだいじょうぶ やわらかいこころを持ちましょう。」	○相田みつをの言葉を紹介し、本時の内容と関連させながら話す。

表 3.　ワークシート

「ダン」をどうする？

6年○組
氏名　○○○○

○今までに誰かと何か物事を決めようとした時、意見が食い違ったことはありますか。また、その時どのような気持ちでしたか。これまでの経験から、考えてみよう。

団地の規則：（　　）

↓

○子どもたちの主張を踏まえて、役員の人たちはどのように思ったでしょう。グループで話し合って意見を書こう。

○子どもたちと役員の人たちの主張を踏まえて、自分だったらどのような主張をしますか。どちらかに○を付けて、その理由を書こう。

飼いたい　／　飼うのはよくない

ダンを飼うことを

↓

○なぜ、あれほど反対していた役員の人たちは、ダンを飼うことを許可したのでしょう。自分の意見を書いて、仲間の考えを書こう。

自分の考え：

仲間の考え：

○今日の授業をふりかえって、誰かと意見が食い違った時、あなたはどう行動しますか。自分の意見を書こう。

Ⅳ．授業のふりかえり

模擬授業を終えて、最後に児童役の受講生（1年生及び3年生）からのコメント（「よい点」「改善すべき点」）を集約し、『みんなの声』（表4）としてまとめたものを次週の授業において配布することにしている。なお、「感想」については、教員が書いたものを記載した。また、各受講生から次の評価表に基づいて、観点別に授業評価（表5）を行うよう求めている。

表4.『みんなの声』

みんなの声

【よい点】	【改善すべき点】
声の通りがよく、導入部から元気で力強い言葉で児童と会話を交わし、授業を進めている。教師が児童と一体になった授業になっている。 導入部で、本時のねらいである意見の食い違いのあった経験について尋ね、興味関心を抱かせるように工夫している。 児童を積極的に指名し、にこやかな表情で接している。 場面を可能な限り可視化し、登場人物の発言や気持ちを板書化して、分かりやすく授業を展開しようとしている。場面ごとに区切っているので、理解しやすい。 個人で考えさせ、グループで話し合い、児童のワークシートをしっかり見たり、児童の会話の中に入っている。グループ内の議論も盛り上がっている。 「自分ならどうするか」という発問を単刀直入に行い、教科化された道徳の課題に取り組んでいる。 自分の意見→他人の意見の聴取→自分の意見のふりかえりという道徳科の趣旨を的確に押さえている。意見も上手にまとめ、自分の言葉で簡易に言い換えている。 私語に対する注意もあり、授業規律も遵守されている。	焦ると早口になる。 話す時に感情をもう少し込めると、もっと児童が授業に溶け込みやすくなる。児童の発言に相槌を打つ時には、感情を込めた方がよい。話し方が少し威圧的になることがあった。 語尾が聞き取りにくい時があった。 児童に範読させる時、ゆっくり読んでもらうなどの指示があるとよかった。 ワークシートの穴埋めの箇所を飛ばしていた。 ワークシートに絵を挿入するなどの工夫があると一層よかった。 課題の説明や問いの意味が分かりにくい箇所があった。 児童が発表している時は、板書をしない。 子どもたちや役員の人たちの意見についても発表させた方が、効果的ではなかったのではないか。 フラッシュカードの取り扱いが雑な点が見られた。貼り忘れか、カード同士が重なってくちゃくちゃになってしまった箇所があった。 小学生対象の授業であるため、難しい漢字にはふりがなをふるとよかった。

【感想】

道徳教科化の重要な柱の1つである「考え、議論する」道徳のお手本であるような授業でした。授業で交わされた議論や、ワークシートに書かれた児童の考えをふりかえると、その内容の充実が看取できます。

また、授業の中で「自分なら、どうするか」という問いも、2つ目の重要な道徳科のポイントです。児童1人1人が、他のメンバーと議論をする過程において自分の意見を見直し、他人の意見に耳を傾けるとともに、その上で改めて犬の「ダン」をどうするのかというのが、この授業のねらいでしたが、この点も的確に把握した授業が行われていました。

さらに、授業が終わった後で黒板を眺めると、この1時間の学んだ内容が明確に分かる板書の仕方でした。終末で用いた相田みつをさんの詩も正鵠を得たものでした。

このように○○先生の授業は、教科化された道徳の重要な点を押さえた玄人好みのものだったと思います。日頃の小学校でのボランティア経験の賜物だと確信します。

表５．評価表

評価項目	評価規準
指導技術	・児童生徒の興味関心を引くように工夫しているか。 ・声の大きさ、話すスピードは適切か。 ・学習のねらいやめあて（何について学ぶのか）が明確であるか。 ・発問の仕方はよいか。また、適切で分かりやすいか。児童生徒の発言に対して適切に対応しているか。 ・説明の仕方はよいか。 ・主体的、対話的、深い学び（アクティブ・ラーニング）の手法を採り入れているか。 【　１　２　３　４　５　】
板　　書	・板書の文字やフラッシュカードは見やすく、分かりやすいか。 ・誤字、脱字はないか。 ・板書は適切か。授業の流れやポイントが分かるように書かれているか。 【　１　２　３　４　５　】
学習内容	・学習内容について十分に知識・理解をしているか。 ・学習指導案に沿って授業を行っているか。 ・学習指導案に沿った時間配分をしているか。 ・教材や資料、ワークシートを適切に活用しているか。 【　１　２　３　４　５　】
姿　　勢	・学ぶ姿勢や学習規律の維持（私語や居眠り等に対する注意）に努めているか。 ・教えることに対してやる気や熱意（身振り、手振り、身体の動き、視線等）を感じるか。 【　１　２　３　４　５　】

（1. 劣る　2. やや劣る　3. 普通　4. 優れている　5. 非常に優れている）

おわりに

模擬授業を行った学生からは、授業時に撮影したVTRに基づいて、ふりかえりとしてレポートを作成することを課している。本授業を行った学生からは、次のような内容のレポート（表6）が提出されているので、併せて掲載する。

今回、道徳教科化に向けての模擬授業を行うに当り、授業者側で重視した点は「考え、議論する」道徳という点である。実際学生のレポートにも見られるように、ただ単に児童に「発問」を発するだけでは、「考え」にストレートに結び付かない。児童を授業に引き込むためには、それ相応の教員の働きかけや授業の創意工夫が必要であるということだ。ただし、学生自身が述べているように、正解がないが故にどのように道徳を方向づけていくかという点での難しさが吐露されている。他方で、児童に気づいて欲しい点や、授業の目標・ねらいも存在するため、彼らの多様な意見を尊重しつつも、うまく方向性を示せないもどかしさや筋道が見えてこない難しさが述べられている。

また、単なる「発問→考え」の繰り返しを避けるため、板書の仕方や児童の発言を掘り下げるような発問の工夫、更には机間指導を通して彼らが主体となって議論が交わせるように意識したことについても、学生自身のレポートからその努力を伺い知ることができる。１人１人の児童に接する配慮、年齢に応じた対応の仕方の工夫、更には児童役の彼らの表情や学習状況の把握の必要性などについても指摘されており、多くの示唆を得ることができた。

学生自身が述懐しているように、教科化された道徳の授業は今後も回を重ね、場を何度も踏んでいくことによって、真の道徳となり得るのである。まだまだ産毛の生えたばかりの道徳ではあるが、授業の実践者である学生も、指導者である教員の側も今後一層研鑽を積み重ねることによって、よりよい道徳の授業が可能になることを確信する。

表６．模擬授業を行った学生のレポート

模擬授業を終えて

S116○○○
○○○○

「道徳の授業はおもしろくない。眠い」というのが、今まで私が児童生徒として模擬授業を受けてきた感想だった。大学生になり、先輩方の道徳の模擬授業を受けてきた中でも、各々の工夫は見られたものの、発問→考えという繰り返しだけの授業では、実際に子どもたちは引き込まれないのではないだろうか、ということを感じていた。そのため、今回自分が模擬授業をするに当って、そういった授業から少しでも変化を作りたいと考えた。これらの思いのもとで、教材研究を行い、模擬授業に臨んだ。

そして、実際に模擬授業を行ってみて、最も強く感じたことは、「道徳の授業は難しい」ということであった。正解がないが故に、教師側が「これ」と思う考えに持って行くことができないし、うまく説明仕切ることができない。しかし、気づいて欲しい考え方や目標は存在するため、子どもたちから出てくる様々な意見を尊重しながらも、うまく方向を示してそちらに持っていかなければいけない。頭では分かっていても、実際に授業を行ってみると改めてその難しさを実感する。これが、答のある算数やある程度道筋が見えている国語等との違いである。これらを改善していくためには、やはり経験を積むことが第一に必要なことだろう。場数を踏むことで、授業の進め方であったり、子どもたちとの対話であったり、いろいろなことが掴めてくるように感じる。今回の模擬授業を通して、道徳の授業の難しさついて感じられたこと、自分自身の技術の必要性について考えることができたことが、大きな成果だと思う。

その他、模擬授業をふりかえってみて、出てきた成果と課題はたくさんある。まず初めに成果としては、先述のような発問→考えの繰り返しという形式を少し崩し、板書の書き方を工夫したり、子どもたちの発言をさらに掘り下げるような発問等を行ったりすることで、単調な授業にならないような工夫をすることができた。さらに、机間指導により、より子どもたちが主体となって議論したり、考えたりすることができるように意識した。一方で、課題としては、第一に小学生６年生を対象とした授業ではあったが、少々威圧的な話し方になってしまい、小学生にしては厳しめの授業になってしまった。実際に目の前にいるのは大学生ではあるが、小学生を対象にしている以上、それに応じた授業を展開する必要がある。模擬授業だけでなく、ボランティアなど子どもと触れ合う時は常にそうであるが、年齢に応じて対応の仕方を変えるようにしなければいけない。「教師は、常に演者でなければいけない。」自分の殻を破り、子どもたちと接することが教員に求められる資質能力の１つでもあるだろう。もう１つ課題となったことは、子どもたちを完全に見れていないことである。フラッシュカードや板書の仕方を工夫したのはよかったが、それが故にやらなければいけないことが増え、児童が発言しているのに黒板を向いている、次の展開に進む度に下を向いて確認してしまうという姿が多くあった。主役は子どもである。今、子どもたちがどういう状況なのか、どんな表情をしているのか、それらは子どもたちの顔を見ながら授業をしなければ分からない。１人１人が今何をしているのか把握できるくらい余裕を持って授業ができるようにすることが求められる。

以上のように、今回の道徳の模擬授業を通して多くのことを学んだ。これまで何度か模擬授業を重ねていく中で、改善された点もあれば、慣れてくるが故に出てくる課題もあった。次に授業をするのは、本当の子どもたちの前だ。これまで学んだことを生かしつつ、さらによりよい授業が展開できるように考え続けていきたい。

註

1）～ 3）大原龍一「『特別の教科　道徳』学習指導案の『イ』『ロ』『ハ』」、道徳科通信 No.1 ～ No.3、学校図書。

参考文献

（1）大原龍一「『特別の教科　道徳』学習指導案のイロハの『イ』」、道徳科通信 No.1、学校図書。
（https://gakuto.co.jp/docs/download/pdf/doutoku01_1.pdf）

（2）大原龍一「『特別の教科　道徳』学習指導案のイロハの『ロ』」、道徳科通信 No.2、学校図書。
（https://gakuto.co.jp/docs/download/pdf/doutoku02_1.pdf）

（3）大原龍一「『特別の教科　道徳』学習指導案のイロハの『ハ』」、道徳科通信 No.3、学校図書。
（https://gakuto.co.jp/docs/download/pdf/doutoku03_1.pdf）

（4）宮城県教育委員会「『特別の教科　道徳』の全面実施に向けて」宮城県教育委員会、平成 29 年 9 月。

（5）群馬県教育委員会「はじめよう！道徳科」群馬県教育委員会、平成 30 年 3 月。